

三河版



白馬山麓の初夏
高木 大
中部白日会所属

花街 今昔ものがたり 三河の70年



第9部

「そりゃ、いい時代だったよ」
半世紀余、花柳界に身を置くかすみ(モコ)安城市相生町は若いころを振り返って笑う。安城市内の芸妓十八人のうち、十二人を抱える置き屋「かすみ寮」のおかみ。芸妓になったのは、十八歳の時。一九六〇年代初め、高度経済成長の真っただ中だった。母も芸妓だったから「やるなら当然、この仕事だと思っていた」。

安城は、全国的に知られる「農業先進地」。多数の人が視察に訪れ、繊維や自動車関連の工場進出も相次ぎ、街は活況を呈した。

人が集えば、花街もにぎわう。民間だけでなく、警察や消防、税務署の人も含め、料亭では連日、宴席が繰り広げられた。

「いい時代」



①20歳のころのかすみさん(左)=安城市内で ②笑美素会の総会に出席したかすみさん(右)=安城市内のホテルで



活況に引く手あまた

「スナックなんてなかったから、二次会は、芸妓さんの三味線に合わせると、「頼むな」と芸妓に告げられて、「あいよ」と答えるのが芸妓さんと家族のようだった。三が日は「付け花」という「お年玉」が、当時の安城花柳界には八る。「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

西三河で戦前から花街が盛んだったのは岡崎。1929(昭和4)年発行の「全国花街めぐり」に全国有数の花街と紹介されている。市の人口が6万人だった時代に、芸者が363人いたとされる。

豊田でも自動車産業の発展とともに、神明町や北町に置き屋が増え、50年代後半に最盛期を迎えた。

現在も根強く芸妓文化が残るのが安城。6軒の置き屋があり、2002年には地元経済界が安城芸妓文化振興会=愛称・笑美素(えびす)会=を発足させた。

東三河では、軍や製糸産業に支えられ、戦前の最盛期に800人の芸妓を抱えた豊橋のほか、田原、豊川、新城にも置き屋があった。「激動・昭和の豊橋」(1991年発行)には「昭和元年における豊橋の芸妓は603人。次いで岡崎の418人、田原の103人」の記述がある。

蒲郡では、戦後開かれた形原、三谷両温泉の隆盛に合わせ、ピーク時にはどちらも100人を超す芸者がいた。

三河の芸者史

「ひいきの人は取り一つ文化として陰で男合いました。自分のお客たちを支えた。三河にもさんにして、芸妓が各地に置き屋があった。三河にもさんが取っ組み合いになっが、時代の流れや娯楽、たこともあってね」。料文化の多様化とともに徐理を運ぶ後輩の足を、擦々に磨かれていく。三河のれ違いざまにわざと引つ70年第九部は、花街のかけ、倒すのを目にした今、昔を見つめる。

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓

「お酒が入ってスム芸妓衆が旅行に出掛けあった。ひいき客が芸妓